

ごあんない

詩人 村瀬 和子

能『遊行柳』

四番目または三番目 老精物 太鼓入 二場

季・場所 ある秋の日暮れから夜明けまで。

奥州白河の関のあたり。作者 観世小次郎信光最晩年の作品。

あらすじ

時宗遊行の聖(ワキ)は、一遍上人の浄土往生(一切衆生は念仏によって浄土に往生出来る)という教えを広げるため、小さなお札を配って諸国を廻っています。日も暮れかかる頃白河の関へさしかかりました。

と、一人の老人(シテ)が現れ、聖がお札を与えます。老人は、先代の遊行上人が通った昔の古い街道を教えるために、ここまで来たのだと言います。案内された古道のかたわらの塚には、朽木の柳が生えていました。老人は柳のいわれを語り始めます。これは古くからある名木で、歌人西行法師が、

道のべに清水流るる柳蔭暫しとてこそ立ち止まりつれ

と、この柳を詠んだことがあるのだと教え、古塚(作り物)の蔭に隠れました。老人は柳の精でした。

遊行の聖は称名を唱え供養を始めます。すると烏帽子(縦に筋目のある柳寂風折烏帽子)・狩衣姿の白髪の老人が現れ、草木ながら十念弥陀の教えを受けた喜びを語り、柳の徳を讃え、清水寺の揚柳観音の縁起など、柳づくしを語って報謝の舞を舞います。やがて夜が明け、あとには風になびく柳の朽木が残るばかりでした。

ひとこと

近世を除いて初演の年月日が分る殆ど唯一の能です。永正十一年(一一五―一四)三月十九日、六世観世大夫元広の勧進能で、作者観世小次郎信光自身が舞ったと言われています。

世阿弥より一時代後に活躍した観世小次郎信光は、『紅葉狩』『船弁慶』『土蜘蛛』などスペクタクルでショー的な風流能を開拓したことで知られています。

応仁の乱以後の時代様相に添うべく華やかな舞台、テンポが早く分りやすく、娯楽性と高い芸術性を併せ持った劇能を大成させた彼は、日本演劇史上特筆される人物です。

『遊行柳』は、彼の晩年の心境を物語る異色の作品で、風に揺れる老いた柳の木、そこに現れる柳の精、閑寂で枯淡な情趣が漂います。

芭蕉も「奥の細道」に、柳の蔭に立ち寄り

田一枚植えて立ち去る柳かな

と、早乙女たちが田を植え終わるほどの時を、感慨にふけたことを記しています。

白河の関は、古代蝦夷対策に設けられた関所でしたが、歌人や文人にとつて歌枕として深い感慨を持って語られました。

日に六回つまり初夜(午後八時)・中夜(夜中十二時)・後夜(午前二時)・晨朝(午前四時)・日中(正午)・日没(午後六時)念仏を唱え、「六十万人決定往生」と刷られた札を配りながら、念仏布教のため諸国を巡る一所不住の遊行上人。歌枕で知られる白河の関、荒れた古塚、歌人に愛でられた朽木の柳を現す作り物には、寂々とした風情が感じられます。

〈サシ〉〈クセ〉は、華やかな柳づくしで、中国の故事や清水寺観音縁起、殊に源氏物語・柏木と女三宮の由なき恋を見ていたのも私であるかも知れないと、〈暮れに数ある沓

の音〉と鞠を蹴る場面など、爪先から紅色が匂い立ちそうな美しさです。

非情の草木が、ただひととき人めいて昔を回想する懐かしさ。老柳の内側に眠っていた記憶を絵巻物のような艶で練り広げます。

遊行上人を西行の朽木の柳の旧跡に導いた老翁が、そこで十念を授かり、後半、柳の精と現れ舞う報謝の序之舞。太鼓入りのリズム感と老翁の枯れた風情は、さらさらと水の流れるような清らかさです。

一抹の艶が仄見えるラストシーン。しばしの生命を感謝し、ああもう夜明け、お別れの時、と命の最後の光を放つ老いの華やぎ。

気の遠くなるほどの時を路傍に立ち続け、人の声を聞き、生きすぎた命。老いとは、生きるとは、老柳の精が語るのは生々流転の人のいとなみです。

※六十万人決定往生

一遍上人が熊野権現に参籠して感得した四句。

六字名号一遍法 十界依正一遍体

万行離念一遍証 人中上々妙好華

の頭文字を集めたもので、一切衆生をさし、世のすべてのひとびとが、必ず極楽往生出来る、と説きます。



遊行柳



国道 294 号線 (旧奥羽街道) 沿いの標識



白河関跡